

英語の移動事象における着点志向という性質について

森下裕三

神戸大学

ymorishi@lit.kobe-u.ac.jp

1 はじめに

本稿では、これまで Verspoor et al. (1999) および Stefanowitsch and Rohde (2004) らが議論してきた移動事象における着点志向 (goal-oriented) という性質が創発するメカニズムについて網羅的かつ統計的なデータを基に議論する。本稿で議論の対象とする英語の移動事象とは以下の (1) に挙げるような例によって表されるものである¹。

- (1) a. They went **into** the saloon. (BNC-CH0)
 b. Scud missiles streaked **through** the sky. (BNC-ABS)
 c. He and an Iranian doctor flew **from** Paris as directly as they could. (BNC-G3R)

移動事象は、Talmy (1985) による研究を発端とし、現在でも多くの研究者が様々な論点から議論しているテーマである (e.g., Beavers et al. 2010)。

これまでも、移動事象については Stefanowitsch and Rohde (2004) がコーパスを用いた実証的な研究を行っている。しかし、次節で詳しく述べるように、彼らの研究には問題がある。本研究では、Stefanowitsch and Rohde らによる不備を補う形でデータを提示し、さらに Verspoor et al. らによる着点志向という性質を擁護する議論を展開する。

本稿の構成は次の通りである。2節で Talmy (1995) による移動事象についての考え方、および Talmy (1996) による移動の経路に関する議論を概観する。さらに Verspoor et al. (1999) および Stefanowitsch and Rohde (2004) による議論を確認した上で、先行研究が抱える問題点について述べる。3節では、前節で議論した先行研究における不備を補うための網羅的かつ統計的なデータの収集方法について詳細に述べる。また、4節におい

て、収集したデータを統計解析した結果を述べ、結果を基に考察を行う。最後に5節で全体の議論を総括し、さらに今後の課題についても簡単に触れておく。

2 先行研究

2.1 移動事象の構成要素

本節では、Talmy (1985; 2000) による移動事象の分析について概観する。彼によると、移動事象には i) 移動物、ii) 移動の基準物、iii) 移動の経路、そして iv) 移動という複数の要素が関与している。たとえば、前節に挙げた (1a) の例では、移動物は *they* によって指示される人々、移動の基準物となっているのは *the saloon* にとりして表される場所、そして移動の経路は *into* によって表される着点ということになる。英語では多くの場合、経路は前置詞または不変化詞によって表される (Talmy 1985; 2000)。また、必要に応じて移動事象には移動の様態も関与する。たとえば、前節に挙げた (1b) の例にある *streak* という動詞は、同じく前節に挙げた (1c) の例にある *fly* という動詞とは異なる移動の様態を表している。

これまで、移動事象の構成要素に移動の経路が含まれる点について述べたが、以降では移動の経路についてより詳しく見ていく。Talmy (1985) によると、移動の構成要素である経路は i) 起点、ii) 通過点、そして iii) 着点に分けられる。それぞれ以下の (2a)–(2c) のような前置詞や不変化詞によって表される²。

- (2) a. *to, onto, into* など
 b. *from, out of, off* など
 c. *across, through, around, over, past* など

¹例文の後の文字列は BNC のサブコーパスを示している。

²本研究では、*up* や *down* や *towards* などの方向性が関与するものは異なる性質を持つとみなし考察の対象から外している。

さらに、次の例からも分かるように、単一の移動事象に経路を表す前置詞や不変化詞が複数表れることも珍しくない。

- (3) a. It [=the plane] flew **from** Los Angeles **to** Las Vegas (…). (BNC-CEM)
b. Stroll **through** the grounds **to** the lake (…). (BNC-AMD)

(3a) の例では起点と着点が、(3b) の例では通過点と着点がそれぞれ言語化されている。

2.2 経路表現と認知

経路の言語化については、もうひとつ重要な点がある。それは、我々がある事柄を言語化する際に注目している部分のみを言語化するという点である (Talmy 1996)。このことを移動事象を例に説明する。前節で挙げた (3a) の例では Los Angeles を出発し、Las Vegas に到着したということが重要であって、飛行機が途中でどのような通過点を通ったのかは重要だと考えられなかったために言語化されていないのである。

そして我々はある事象について注意を向ける場合、起点より着点の方がより重視されやすく、また起点と着点は通過点よりも重視されやすいというのが Verspoor et al. (1999) による主張である。Verspoor et al. は主張を指示する根拠として以下の例による容認度の違いを挙げている程度である。

- (4) a. I climbed onto the roof.
b.??I climbed from my room.
(Verspoor et al. 1999: 97)

Verspoor et al. による主張が正しければ、移動事象においても着点が注目されることが多く、その他の経路表現については言及されない場合が多いという予測ができる。

2.3 Stefanowitsch and Rohde (2004)

Stefanowitsch and Rohde (2004) らは、Verspoor et al. による主張を実証的に検証すべくコーパスを用いた計量的な分析に踏み出した。しかし、彼らの研究では限られたいくつかの動詞のみを考察の対象としており、さらに物理的な移動ではない比喩的な表現も分析に組み込まれているなどの問題を抱えている。それでも、

Stefanowitsch and Rohde は限られたデータから、全体的には着点志向という傾向は見られるという結論を下している。しかし、彼らの分析には、コーパス内に生起する頻度が動詞ごとに大きく異なるという視点が欠けており、この点が英語における移動事象の性質の全体像を捉えそこなう原因となっている。この点については4節で改めて議論する。

3 データのサンプリング

本研究では Levin (1993: 263–270) が移動動詞としてリストしている動詞のうち移動の様態が関与する動詞に *go* と *come* を加えた以下の 123 の動詞を考察の対象とした³。

- (5) *advance, amble, bolt, bounce, bound, bowl, canter, cavort, charge, clamber, climb, clump, coast, come, crawl, creep, dart, dash, dodder, drift, file, flit, float, fly, gallop, gambol, glide, go, hasten, hike, hobble, hop, hurry, hurtle, inch, jog, journey, jump, leap, limp, lollop, lope, lumber, lurch, march, meander, mince, mosey, nip, pad, parade, perambulate, plod, prance, promenade, prow, race, ramble, roam, roll, romp, rove, run, rush, sashay, saunter, scamper, scoot, scramble, scud, scurry, scutter, scuttle, shamble, shuffle, sidle, skedaddle, skip, skitter, skulk, sleepwalk, slide, slink, slither, slog, slouch, sneak, somersault, speed, stagger, stomp, stray, streak, stride, stroll, strut, stumble, stump, swagger, sweep, swim, tack, tear, tiptoe, toddle, totter, traipse, tramp, travel, trek, troop, trot, trudge, vault, waddle, wade, walk, wander, whirl, whiz, wind, zigzag, zoom*

このように網羅的に移動動詞を考察の対象とすることで、前節で紹介した Stefanowitsch and Rohde (2004) が抱えるデータの偏りという問題を解消することができる。

しかし、BNC のような大規模コーパスを用いた場合、各動詞の生起頻度は膨大になり数十万件の用例全てを目視で確認した上で分析するというのは現実的ではない。そのため、本研究では、推測統計に基づき要求精度 5%

³*backpack* や *frolic* のように BNC に移動動詞としての用例が見つからなかったものや *move* のように移動の様態が関与しないようなものなど、いくつかの動詞は本研究での調査対象から除外して残ったものが (5) に挙げた 123 の動詞である。

で、信頼水準が95%となるように各動詞の標本をサンプリングした。さらに、以下の(6)の例にあるような移動を表さない用例を目視で取り除き、物理的な移動を表す用例のみを抽出した⁴。

(6) a. The idea comes from the Winnie The Pooh characters created by A. A. Milne.

(BNC-K1B)

b. I ran out of sugar. (BNC-KBW)

以上のようなサンプリングおよび目視による確認作業を通じて、移動事象を表す8,621の英語の用例を採取した。さらに、抽出した8,621の全用例に対して、起点、通過点、着点のどの経路表現がいくつ生じたのかという情報を付与した。

4 結果と考察

前節で提示した手法によって整理したデータは以下の表1のようにまとめられる。例えば、goという動詞は、経路表現が生起しない66例をのぞくと、着点を表す経路表現は47例も生起する一方で、起点や通過点を表す表現はそれぞれ15例と11例しかなかった。このことからgoが着点志向を持つことが分かる。しかし、ambleの場合は、通過点を表す表現が共起することが多く着点志向はgoほど強くないことが分かる。

表1: 動詞と経路表現との共起関係

Verbs	Null	Source	Trajectory	Goal
advance	19	2	14	25
amble	27	13	40	27
...
go	66	15	11	47
...
zigzag	4	1	3	0
zoom	1	3	0	1

しかし、個別の事例だけを見ても英語の移動事象の全体像を捉えることはできない。本研究では、上記の123の動詞全ての関係を記述するためにコレスポネンス分析 (correspondence analysis) と呼ばれる多変量解析を用いる。コレスポネンス分析とは、変数に対する

⁴他にも否定文や way 構文の用例なども取り除いている。

相関関係が似た要素同士をより近くに、変数に対する相関関係が異なる要素同士をより遠くにプロットする統計的な手法である。本研究では、経路表現の出現傾向が似た動詞がより近くにプロットされることになり、移動事象の全体像を視覚的に確認することができる。コレスポネンス分析の結果を示したものが以下の図1である。

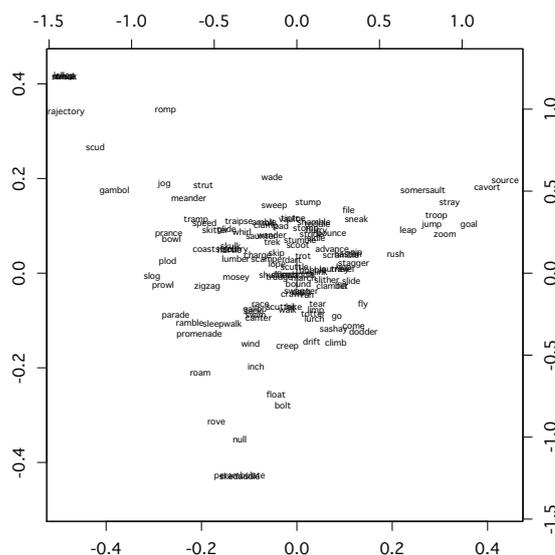


図1: コレスポネンス分析の結果

図1を見るかぎり、先行研究で議論されている通り着点志向だと考えられる動詞として zoom や jump や leap などが挙げられる。しかし、全ての移動動詞が着点志向であるわけではない。例えば、scud や gambol などは着点志向というより通過点志向である。さらに重要な点は、かなり多くの動詞が図1の中心部に位置しているということである。この事実は、英語の移動動詞の多くが起点、通過点、着点のどのような表現ともバランスよく共起するということを意味している。言い換えれば、先行研究で言われているような着点志向という性質は英語の移動動詞全体に当てはまるような性質ではないということになる。

では、Verspoor et al. (1999) らが主張した着点志向という性質は誤りなのかというとはそうではない。コレスポネンス分析の結果は統計的にサンプリングされた標本に基づいたものである。つまり、コーパス全体での個々の動詞の生起頻度については考慮していない結果である。本研究で考察の対象とした英語の移動動詞はどれも BNC での生起頻度が大きく異なる。たとえば、動

詞のタグがついた *stroll* は 406 例しかないのに対して、同じく動詞のタグがついた *go* は 211,897 例も存在する。つまり、移動動詞全体を見れば特定の経路表現に志向性を持つ動詞はそれほど多くないが、*go* や *come* や *run* といった高頻度な語によって全体の印象が大きくゆがめられているのである。

認知言語学では、Langacker (1987; 2000) らによって用法基盤モデル (usage-based model) という考え方が提唱されている。この考え方は、高い頻度で生起する語や表現がスキーマ化し定着することによって、そうした表現が典型的としてみなされるようになる、とするものである。この考え方に従えば、他の動詞と比べると着点志向性が比較的強く、かつコーパス内に高頻度で生起する *go* や *come* といった表現が移動動詞と着点を表す経路表現からなるスキーマを形成すると考えられる。

5 結論と今後の課題

本稿では、Verspoor et al. (1999) らが主張した着点志向という性質を検証するための議論を行った。コーパスを用いた実証的な調査の結果から、英語の移動動詞の多くは、特に着点志向という性質は持ち合わせていないということが明らかになった。しかし、実際には、着点志向という性質を持つ *go* や *come* といった動詞が高頻度で生起するために、着点志向という性質が移動事象全体を特徴付けるものとして妥当であることを示した。

また、本研究から認知言語学およびコーパス言語学の理論的な示唆として、個々の語の性質に目を向けるといったミクロな視点と、コーパス内での個々の語の生起頻度にも目を向けるといったマクロな視点の両方を同時に満たすことの重要性を挙げることができる。

参考文献

Beavers, John, Beth Levin and Shiao Wei Tham (2010) The Typology of Motion Expressions Revisited. *Journal of Linguistics* 46, 331–377.

Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

— (2000) A Dynamic Usage-based Model. In *Usage-based models of Language*, Michael Barlow and

Suzanne Kemmer (eds.), 1–63. Stanford CSLI Publications.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: Preliminary Investigation*. Chicago; London: University of Chicago Press.

Stefanowitsch, Anatol and Ada Rohde (2004) The Goal Bias in the Encoding of Motion Events. In *Studies in Linguistic Motivation*, K. U. Panther and G. Radden (eds.), 249–267. Berlin: Mouton de Gruyter.

Talmy, Leonard (1985) Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. In *Language Typology and Syntactic Description Vol. 3*, Timothy Shopen (ed.), 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.

— (1996) The Windowing of Attention in Language. In *Grammatical Constructions*, Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.), 235–287. Oxford: Oxford University Press.

— (2000) *Toward a Cognitive Semantics Vol. 2: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Verspoor, Margolijn, René Dirven, and Günter Radden (1999) Putting Concepts Together: Syntax. In *Cognitive Exploration into Language and Linguistics*, René Dirven and Margolijn Verspoor (eds.), 87–115. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.

コーパス

British National Corpus: XML Edition (available in <http://www.natcorp.ox.ac.uk>)